

電子書籍とアーティスト・ブックの関係

The Relation between Electronic Books and Artist's Books

岡部 祥子

Shoko OKABE

Abstract

Recently all kinds of information devices like iPad or electronic books have spread rapidly and there is a great fear for the existence of paper books. Artist's books which allow people to plan, design, edit and also publish them themselves have spread. With this in mind, I researched many art works at the Fleet Library of the Rhode Island School of Design, Providence, U.S.A. and analyzed the definition of artist's books and the reasons why people focus on them. There are eternal possibilities as 'books' to leave records, make history and convey information. However 'art works' convey it the concept or message of the artists and 'the media' to give people a spatial experiences. Furthermore I figured out the relation between electronic books and artist's books by research and analysis of present society.

Keywords: メディア、アーティスト・ブック、電子書籍

1. はじめに

今から約3年前、アメリカ合衆国で Amazon.com（以下アマゾン）から『キンドル（kindle）』が発売されてから、まだ記憶に新しいアップル社製『iPad』の発売と、現在電子書籍と呼ばれる機器が世間を賑わせている。こうした機器の出現は、インターネットの普及によりその存在が危ぶまれてきた紙媒体の出版物に、更なる追い打ちをかけることになった。多くの雑誌が休刊し、店を閉めた書店や出版社も決して少なくはない。その一方、この流れを受けて更なる注目を集めているアナログメディアがある。それがアーティスト・ブックである。本稿では、アメリカのプロヴィデンスにある、ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン、フリートライブラリーでのアーティスト・ブックコレクションの調査結果を基に、アーティスト・ブックとは何か、またアーティスト・ブックが着目されている所以を電子書籍などのデジタル機器との比較を踏まえた上で考察した。

2. アーティスト・ブック

2-1. アーティスト・ブックとは

アーティスト・ブックは、1960年代後半からのポップ・アートやコンセプチュアル・アートの動向の中で、本の形式や概念から発想を得た作品のことを指す。「アーティスト・ブック」という用語は、1973年にフィラデルフィアのムーア美術大学で、ダイアン・ヴァンダーリップが「アーティスト・ブックス」という展覧会を企画・開催したことで生まれた。（注1）アーティスト・ブックの先駆的な作品として、そ

の用語が生まれる7年前の1966年にエド・ルーシャ（Ed. Ruscha）によって作られた作品、『Every Building on the Sunset Strip（サンセット通りの全ての建物）』（図1）が挙げられることが多いが、20世紀初頭のイタリア未来派の作品や、マルセル・デュシャンの作品の中にも、今でこそアーティスト・ブックと呼べる作品が1930年代には既に作られている。（注2）

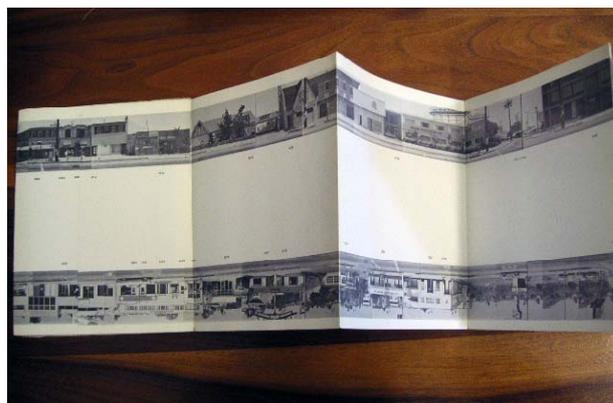


図1. 『Every Building on the Sunset Strip（サンセット通りのすべての建物）』 Ed. Ruscha, 1966

エド・ルーシャによるこの作品は、日没時に建物と建物で挟まれた道路から一連の建造物を撮影し構成したもので、写真の下には建物番号が書かれている。アコーディオン形式の本になっていて、ページを繰るごとに観る者を当時のサンセット通りへと引き込み、1966年のサンセット通りを端から端まで体験することができる。当時の通りを知らなくても、

モノクロで記録された一続きの街の様子から、どこか懐かしくあたかも自分がその場所を通ったことがあるような気分させられる。本来の本の役割である「記録」、またその記録を「伝達」するだけではなく、それらの歴史を鑑賞者が直接作品に触れることで体験することができるのはアーティスト・ブックの大きな特徴である。

2-2. アーティスト・ブックの種類

近年では日本でもアーティスト・ブックを取り上げた企画展や、それらの作品を販売する書店も増えているため、ようやく「アーティスト・ブック」という知名度が上がってはきているが、「アート」や「アーティスト」、そして「ブック(本)」という用語自体が漠然とした意味を含むために、未だ「アーティスト・ブック」の定義は曖昧なままである。だがそれ故にあらゆる表現を可能にするため、型にはまらない、自由な発想の作品が次々に発表されている。ロードアイランド・スクール・オブ・デザインのフリートライブラリー(以下、RISD、フリートライブラリー)には 1300 作品以上のアーティスト・ブックが所蔵されており、主に下記のような種類に分類されていた。

- Accordion Fold Structures
- Alphabet Books
- Altered Books
- Artists' Sketch Books & Journals
- Book Objects / Unusual Structures
- Collage
- Conceptual Books / Artists' Multiples
- Handmade Paper
- Concrete and Visual Poetry
- Japanese / Stab Binding
- Letter Press Printed
- Miniature Books
- Original Prints
- Photography
- Poetry
- Pop-Ups & Movable Elements
- Special Collections
- Typography / Text & Image
- Unique Books / One-of-kind Books
- Zines

作品の形状や素材、また内容も多岐に渡るため、多くの作品が当然複数の項目に当てはまる。(図 2) またアーティスト・ブックの発展と共に、どの項目にも当てはまらないような斬新な作品が今後次々と現れることだろう。

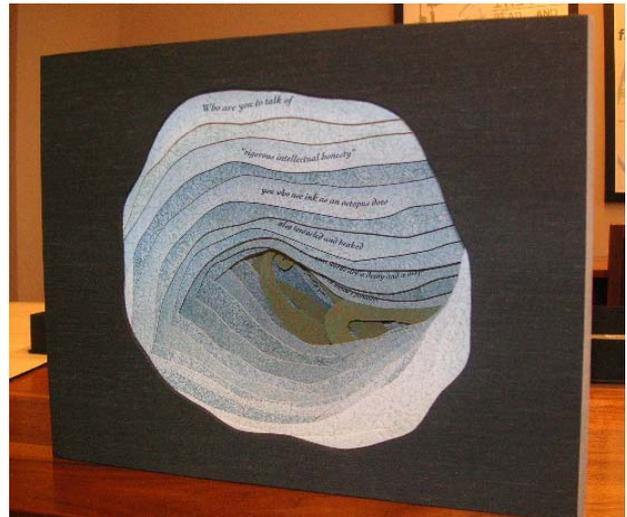


図 2. 『Octopus』 Elizabeth McDevitt and Julie Chen、1992

Elizabeth McDevitt による詩に Julie Chen がイラストレーションを担当したこの本は、Conceptual Books / Artists' Multiples、Poetry、Unique Books / One-of-kind Books の項目に属す。

2-3. ジン (Zine) の流行

フリートライブラリーにもアーティスト・ブックのコレクションとして実際に学生が作った作品が有名アーティストの作品と肩を並べて所蔵されていたが、(図 3) アーティスト・ブックは国や職業、肩書きに関係なく幅広い世代に作られている。その中でもとりわけ一般の人に作られることの多い作品がある。それが“ジン (zine)”である。ジンとは 1980 年代に DTP やコピー機の普及と共に誕生した。その名称は“マガジン (magazine)”のジンからとられ、自分の好きな対象を好きなように書くということから“ファンジン (fan zine)”と呼ばれていたものが省略され“ジン”になったと言われている。(注 3) 写真や絵、詩などをコピーしたものをホチキスなどの簡易製本でまとめた小冊子で、書店に限らず雑貨屋やカフェなどで販売されたり、また自分のプロモーションのために無料で配布されることも多い。日本では聞き覚えのあるミニコミや同人誌、また編集やデザインは自分で行い活版印刷などの印刷だけは専門の印刷所に依頼して製本されるリトルプレスなどもあるが、最近では総称して“ジン”と呼ばれる事が多い。このジンがここ数年あらゆるメディアに取り上げられたりジンを専門的に扱う書店が急増したりと、目覚ましい勢いで普及している。今年で 5 回目となるニューヨーク近代美術館で行われた NY ART BOOK FAIR や、日本でも 2009 年から行われている ZINE'S MATE といった大規模なイベントもあり、毎月のように全国各地でジンのイベントが催されている。(注 4)

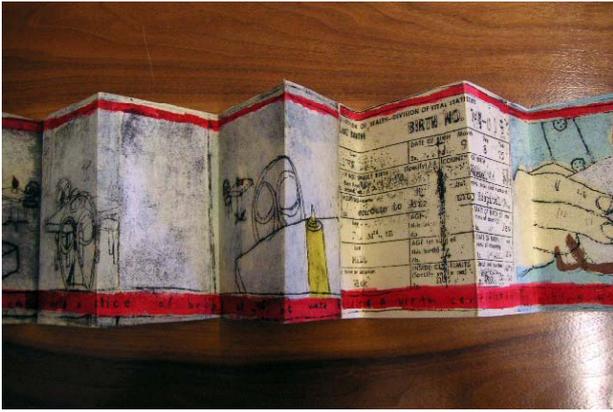


図3. 『In a Cafe』 Brautigan and McConihe, 1997
当時の RISD の学生による作品。

3. 電子書籍とアーティスト・ブック

3-1. 電子書籍の出現

2007年の秋にアマゾンが『キンドル』に始まり、『キンドル2』、『キンドルDX』と相次いで発売、それを追いかけるようにバーンズ&ノーブル社の『ヌック』やエヌビディア社の『テグラ』等多くの企業が電子書籍の開発や発表を行い、そして記憶に新しいアップル社の『iPad』の発売と、タブレット型コンピューターが世の中を賑わしている。(注5) 紙の書籍の売上冊数は1996年の約9億1500万冊をピークに下降の一途を辿っているが、このような電子書籍の出現によりその傾向はますます強くなるだろう。

ではなぜここまで電子書籍が注目されているのか。書店に行かなくても書籍が購入できるだとか、電子書籍ひとつで何百、何千という書籍を持ち運ぶことができるなどといった利便性は勿論だが、ここで特筆すべきは自主出版についてである。これまで出版社が独占していた「本を出版する」というビジネスが、電子書籍が普及した今、崩壊しようとしている。

電子書籍の出現により、プロ・アマの区別に関係なく誰でも本を販売することが一般的になった。また、プロ・アマだけでなく、新・旧の区別もなく全ての本が平等に販売される。佐々木俊尚氏はこれらの社会的背景として「マス感性の消滅」を挙げている。日本社会が物質的に豊かになった1980年代には、「記号消費」という商品が本来持っている機能的価値とは別に、社会的な付加価値が重要視される傾向にあった。(注6) だがそれも、1990年代の終わりには長引く不況によって格差社会へと日本が変わっていくのと同時に、モノで自分を語るという思考がなくなり、好みの細分化へと繋がっていくのである。その傾向はモノだけでなく、情報の面からも読み取れる。インターネットの普及による情報社会の定着と共にブログやmixi、facebook、twitterといったSNSが横行している現在、私たちは誰もが発信者となり、同時に受信者として必要な時に必要な情報だけを拾い集めるを行っている。

インターネットを介した人と人とのコミュニケーション方法と、電子書籍のビジネスモデルが、根本的には同じ構造をとっているため、多くの現代人が電子書籍を受け入れるのに時間を要さなかったのだろう。

3-2. 電子書籍とアーティスト・ブックの共通点

電子書籍の出現により紙の本の消滅が囁かれている中、なぜアーティスト・ブックは年々注目されているのか。そこには、相反する存在でありながら、電子書籍とアーティスト・ブックの間にはいくつかの共通点があるのだ。第一に、電子書籍の自主出版がそうであるように、アーティスト・ブックにもプロ・アマの区別がない。年齢や国籍に関係なく誰でも出版・発表ができることである。そして次に「所有する」という点でも電子書籍とアーティスト・ブックは共通するところがある。2008年にケータイ小説が大ブームとなったが、その際、ケータイ小説の読者は自分の好きな小説が書籍化されると保存用、貸し出し用、閲覧用と、何冊も購入するという傾向があったようだ。ケータイ小説のコンテンツがシンプルである分、書籍という“モノ”になるとそこには「所有する」という意識が強調され、“宝物”のような存在になるという。アーティスト・ブックにおいても、芸術作品を購入するという機会はこれまで限られた富裕層やコレクターの間でしか行われていなかったが、アーティスト・ブックの中でもジンに関しては多くの作品が1000円台から、また他のアーティスト・ブックでも10000円払えば購入できる作品もあり、お金のない若い世代でも芸術作品を所有できるのである。実際に、現代の10代20代の若者世代はインターネットやコンビニエンスストアが当たり前で存在している環境で育ったことからモノに対する欲求が希薄であると言われているが、一方で自分自身の心の快適のために消費する傾向にあるという調査も出ている。(注7)

教育現場でも、新たなツールとして電子書籍が取り入れられ検証が行われている最中であるが、同様に美術・芸術系の大学ではアーティスト・ブックを用いた講義・演習も今後増加するだろう。RISDだけでなく、アメリカの美術・芸術系大学では多くの学校で既に各専攻に適したアーティスト・ブックを用いた講義が取り入れられている。幅広い表現を可能にするアーティスト・ブックは、印刷技法、製本方法、構造、そして芸術作品ということで、ひとつの作品を見ても多くの要素が含まれているため、美術・芸術系には適当な教育ツールとなるのである。日本でも一部の美術・芸術大学ではアーティスト・ブックの収集が行われ始めているが、今後はより一般的になっていくだろう。

また、偶然と言うべきか、日本電子出版協会(JEPA)が設立されたのが1986年、アーティスト・ブックが日本で広まり出したのも1980年代であり、2010年現在その両方が足並

み揃えて日本に広まったのも事実である。(注8) 戦後日本のあらゆる社会的背景の中で、電子書籍とアーティスト・ブックという真逆のモノが同時に生まれるべくして生まれたのだ。

4. まとめ

アーティスト・ブックを特集した展覧会やイベントが近年急増していることは既に述べたが、芸術作品や本としてだけでなく、ひとつのメディアとしても注目され始めている。最近ではソニーマーケティング株式会社と若者を中心としたカルチャー雑誌『リバティーンズ (LIBERTINES)』編集部による、“スクール・オブ・ラブ・ジン”というイベントが開催され、ソニーの新製品を用いてジンを制作するというワークショップが行われたり、株式会社東京ピストルによる古本をくり抜いて植木鉢とする『本鉢』や、くり抜いた本の中に商品を入れて本そのものをパッケージにしてしまう『“RAMPO” 江戸川乱歩完全復刻眼鏡』といった商品も販売されている。電子書籍の出現により“本”という存在に注目が集まった今、デジタルとアナログの両極端に位置する電子書籍とアーティスト・ブックは互いに作用し合い、今後も更なる発展を遂げていこう。そして社会や環境の変化に敏感に反応し、次々と進化を続けているアーティスト・ブックという芸術作品をこれからも追求していきたい。

注および参考文献

- 1) ロバート・アトキンズ、杉山悦子・及部奈津・水谷みつる訳：現代美術のキーワード、美術出版社、51、1993
- 2) フォルトゥナート・ディペーロの『未来派ディペーロ』(1913-1927)、ブルーノ・ムナリー『叙情的な水瓜』(1934)、マルセル・デュシャン『グリーン・ボックス』(1934) のことを指す。
- 3) 江口宏志：LITTLE PRESS & ARTIST ZINE NOW、STUDIO VOICE、391、26-27、2008
- 4) 東京・中目黒に書店“UTRECHT”と表参道にギャラリー併設の書店“NOW IdeA by UTRECHT”を運営する江口宏志と、ロンドン発のアート雑誌『PAPERBACK』編集長兼クリエイティブディレクターであるオリバー・ワトソンの二人によって、“ZINE'S MATE”が確立され、2009年7月10日から12日まで“TOKYO ART BOOK FAIR 2009”という日本初の大規模なアーティスト・ブックイベントが開催された。第2回は2010年7月30日から8月1日。世界最大のアートブックフェアである“THE NY ART BOOK FAIR”にも、ZINE'S MATE に送られたジンやアーティスト・ブックが出展された。(2010年11月5日から7日まで。) その他にも、2010年6月に東京にてZINEのディストリビュート・レーベル“parapera”

主宰の大山光平を始め、アーティストやキュレーターなどを含めた7名で企画された“ZINE PICNIC”というZINEの閲覧、販売、交換を目的としたイベントが行われ、次回は東京・大阪で同時に開催するなど、アーティスト・ブック関連のイベントが相次いで行われている。

- 5) 佐々木俊尚：電子書籍の衝撃ー本はいかに崩壊し、いかに復活するか?ー、ディスカヴァーアートゥエンティワン、31-36、2010
- 6) フランスの哲学者、ジャン・ボードリヤールが1970年に言い始めた言葉である。(佐々木俊尚：電子書籍の衝撃ー本はいかに崩壊し、いかに復活するか?ー、ディスカヴァーアートゥエンティワン、162、2010)
- 7) 山内真太郎：心を満たすためにお金をつかう若者たち、広告、383、24-25、2010
- 8) 江澤隆志：電子書籍の基本からカラクリまでわかる本、洋泉社MOOK、122、2010

その他参考文献

- ・ 山本和宏：メディアとしてのアーティスト・ブックーフルクサスからデジ・ブックまでー、美術手帖、49、745、1997
- ・ ジョルジョ・マッフェイ、瀧下代訳：ブルーノ・ムナリーの本たち、株式会社ビー・エヌ・エヌ新社、2010
- ・ 中川素子+坂本満：ブックアートの世界 絵本からインスタレーションまで、水声社、2006
- ・ エドワード・ルーシー＝スミス、岡田隆彦・水沢勉訳：現代美術の流れ 1945年以降の美術運動、パルコ出版、1986
- ・ 前田壘：紙の本が亡びるとき?、青土社、2010
- ・ 港千尋：書物の変ーグーグルベルグの時代ー、株式会社せりか書房、12、2010

(提出期日 平成22年11月29日)